

Donald Keene

講演者ドナルド・キーン氏は、コロンビア大学名誉教授。1922年ニューヨーク生まれ、1942年コロンビア大学卒業、米国海軍に日本語通訳翻訳官として従事、1949年ケンブリッジ大学日本語講師となる。1951年近松門左衛門の『国性爺合戦』の論文でコロンビア大学文学博士取得、1960年コロンビア大学東洋学部日本語日本文学教授、1979年研究論文日本文学史でケンブリッジ大学文学博士号を授与される。1986年アメリカアカデミー会員、1990年日本学士院会員、1993年勲二等旭日重光賞を受賞。作品は多く 菊地寛賞、日本文学大賞、全米文芸評論家賞などを受賞。

最も基本的なこととして、日本はどういう国か日本人はどういう国民かと考えると、どうしても美意識の問題に触れなければならないと思います。いつから生まれたかは分からないが、仏教の中でも一番有名だった僧侶空海（弘法大師）が中国へ行って、恵果（えか、またはけいか）の弟子になりました。空海は真言宗の開祖で、恵果から次のようなことを教わったのです。密教の教義は余りにも深遠であるので、なかなか言葉で表現できない。悟っていない人にその教義を示すには図画を使うべし、つまり深い難しい哲学を理解できないような人に宗教の原則を説明するにはどうしても絵や彫刻が必要である。別の言葉で言えば、真言宗はどういう宗派かということ、曼陀羅という絵を説明する宗派であると言ってもいいでしょう。日本

人にとって仏教美術とは単にお寺を理解するものではなくお経の難解な徳を説明するにはどうしても絵が必要だったのです。ヨーロッパのキリスト教にも美術があります。文盲の人にも聖書が分かるように教会の内外にも絵や彫刻があった。しかし、恵果の話はちょっと事情がちがっていました。仏教に詳しい人でもどうしても絵画の力を借りる必要があったのです。平安朝になってから貴族階級の中で特に女性がお経の文句を書いた扇子などを持っていたが、そこには絵も描いてありました。そして涼しい風と、お経の利益を受け同時にその絵を楽しんでいました。その絵は、仏さまの絵ではなくむしろ風俗画とか花鳥画などがほとんどでした。日本の美術の中でも有数の美しいものの一つに、平家が巖島神社に奉納したお経がありますが、その景色の絵や全体の美しさは実にみごとなもので、私は、一度、全部を見たことがあるがものが言えなくなる程すばらしいものでした。

仏教は必ずしも美術と関係があったわけではなく日本の仏教には変わった伝統があったと考えられます。例えば、昔のセイロン、今のスリランカのアナラプーダという所に立派なお寺がある。古い、2000年前のものですが、飾り気は全くありません。柱は四角で、何も書いてなく、美しいものは何もありません。どこを見ても美術らしいものはありません。いや、それは間違いです。ただ一か所だけに、美しい花や葉が彫ってあります。それはどこかというと便所だったのです。(笑)ここでは、僧侶たちの美術に対する侮蔑がみてとれます。美術は嘘のもので、仏さまの教えとは関係ないという考えです。これは日本の伝統にはありえないことです。日本では仏教と美の関係は密接で、他の仏教国には見られない美しさがありました。例えば、京都の近くの浄瑠璃寺にある吉祥天の有名な絵画がありますが、実に美しいものです。まず見るものは美しさにうたれ、それから宗教的なことが出てくるかもしれません。しかし、日本人が仏教を求めたときどうしても美しくなければならぬという考えがありました。どこのお寺に行っても思い出に残るような庭、彫刻、建造物などがあります。

しかし、仏教に限らず古い本に大きな特徴があります。古い本の特徴が東アジアで最も変わっているのは、日本でしょう。日本では写本がほとんどで、中国には写本はほとんどありません。敦煌の洞窟にはあったようだが、大体においては後世になると活字にしてきました。たとえば、学者が亡くなると、その息子が義務として父親の仕事を活字にしました。それで、中国文学を専攻する学生は手で書いた字を読む苦勞はしなくていいのです。しかし、日本文学の場合、人が書いた文字、略字、変体仮名など 罣があって困ることが多いですが、それを知らないと日本文

学全体は読めないのです。そして、日本人はどうしてそれほど写本にこだわったか。どうして日本人は印刷技術を知っていても、文学を印刷しなかったかということは、問題になります。世界で印刷された文字で最も古いものの中に日本の法隆寺の百万塔陀羅尼があります。奈良朝の印刷物が日本に残っています。また、中世でも仏教の本ならば、大体は印刷していました。しかし、『古事記』や『日本書紀』、『源氏物語』、『古今集』は印刷することは全くありませんでした。一番新しい版は16世紀末頃です。つまり、日本人が朝鮮から印刷の活字をおぼえてから印刷業がはやるようになりました。その前に印刷した本はほとんどないのです。その理由を考えますと、例えば『古今集』、日本人にとっては最も大切な本のひとつだったそれは勅撰集の最初であり、また日本人は『新古今集』の歌人をはじめとして、それ以降、自分たちのモデルは古今集であるとして、ものを書いてきました。『源氏物語』の中にも無数の引用があります。会話にも『古今集』の詞を引用していました。しかし、ついに『古今集』は印刷されなかったのです。日本の古本屋にいくと、写本の多くが『古今集』と『伊勢物語』です。どうしてこれらを印刷しなかったのかと言いますと、私の考えでは日本人は本も美術品だと思っていたからではないか。もし、印刷されたものはみな同じでたとえ千冊でも百万冊でも字は変わらないのです。しかし写本の場合は字を書いた人の性格や上手下手によって字が変わりました。これを日本人は喜んでいました。また紙とか墨の濃淡に特徴を感じました。日本人はこれらの美しさを無視できなかったのです。印刷物は写本と内容は全く同じでも、日本人はそれだけでは満足しませんでした。美しい本が大切でした。そして写本でなければ美しく思われませんでした。

物語の場合も同じで挿絵はたいへん大きな役割を果たしていました。例えば、『源氏物語』よりも前に書かれた『宇津保物語』には、写本の中に、ここには絵があると、何回も出てきます。さらに詳しくここにだれその家がありますとか、仙人が集まっていますなど、簡単な印が残っています。要するに最初はいろいろと挿絵があり、読む人は挿絵を頼って読んでいたかもしれません。『源氏物語』にも挿絵が入っていたはずですが、『源氏物語』の中でも本に挿絵があったことが書いてあります。たとえば、末摘花が本を読んでいる時に絵を喜んでいたことが「絵にかきたるをぞ時々なぐさめにしたり」という文から様子がわかります。『源氏物語』には物語絵という言葉があります。逆に、まず絵があって、それに女房が詞をつけて物語が出来た例もあります。『源氏物語』の絵巻物は日本で一番すぐれた美術だとよく言われています。17世紀の初め頃から活字が多くなりましたが、後で日本人はこれを捨てたわけです。これは世界の歴史にはない現象です。便利なものを知っ

ていてこれを拒否し、これと似たこととして室町末期から、徳川初期に日本人は鉄砲をもっていました。鉄砲を捨てて刀に頼る過程がありました。このように日本人は活字の作り方を知っていたし、時々哲学の本とか謡曲の本など、活字本を作っていたが、徳川時代の文学のほとんど全部が絵入り本です。これが18世紀の日本文学の大きな特徴です。日本文学と絵との間に密接な関係が生まれました。私の大好きな作品に『江戸生まれ艶気の樺焼』があります。これは1785年ですが、艶二郎という醜男の話で、彼は金があるので たくさんの女性を買ったりするが、失敗ばかりする。面白いのはこの作品中の絵のなかの上や下 壁などいろいろなところに文句が書いてあり これをどういう順序で読んでいいのか分からないくらいです。もし、活字本にして 挿絵がなくなったら全くつまらないものになります。面白いと思われているのは絵があるからです。絵と文と一緒にしているからです。これは非常に大切な事です。 どうして日本人は活字本を知っていても木版本に戻ったのか。私の考えでは、単なる経済的な理由ではなく 美の問題です。日本人は活字は本の一部分でしかない。完全な本には絵がなければという考え方があるのではないのでしょうか。現在でもその傾向が残っています。どの新聞の朝刊にも夕刊にも、連載小説が載っていますが、例外なしに挿絵があります。小説作家の名の隣りに同じ大きさの字で挿絵画家の名も出ています。読者も画家の名を覚えています。谷崎潤一郎の『鍵』に棟方志功の挿絵がありました。あれがなければ『鍵』は理解できないし、それがなかったらあの小説は非常に冷たい小説に思われます。棟方志功の挿絵があったから作品はほほえましいような、おもしろい、楽しい小説になっています。こうした例はいくつもありません。しかし外国にはこのような例は少ないです。

以上、活字、あるいは木版など 本の体裁についてはなしました。

次に本の内容です。まず『源氏物語』における美について。『源氏物語』がどんな小説であるかと言えば、やはり美を謳った小説と言うしかないでしょう。人々の生活のことはすべて美しいです。衣類は、十二単衣など細かいところまでつぶさに書いてあります。また、人々の家、庭、花とか家と季節感について詳しく書いてあります。日本人は特別に季節に敏感であると言いますが私は全然信じません。他の国だって四つの季節があるし、また日本の季節は、それ程、はっきりしていないと私は思っています。夏は特にそうです。夏は、まず長い雨が続く。この後に雨が降らないのですごく暑いです。あれは一つの季節といえるのでしょうか。私は四季というより五季だと思う。(笑)ともかく 季節に敏感であることが、必ずしも日本独特とは思いません。しかし一つの事実として日本人は、季節についてたえず書いています。古今集ですが、歌の並べ方は日本独特なもので、最初の巻は春、夏、秋、

冬となります。他の国には季節による並べ方はないと思います。他の国では詩人の生まれた年の順序で並べるのが普通です。日本にはもう一つの並べ方があります。それは『懐風藻』とかですが、漢詩集には人の地位によって並べてあり、天皇の詩が先で、次に皇太子であるとか、いずれにしろ季節によって並べるのは珍しいものだと思います。『源氏物語』の中にも季節のことがたびたび出ています。

余談ですが、わたしはヨーロッパのオペラの季節について調べたことがありますが、それがほとんどありません。いつの季節なのか分からないのです。例えばヴェルディの傑作『オテロ』も暖かいはずなのですがいつかわからない。例外はあります。プッチーニの『ラ・ボエーム』ははっきり冬です。西洋人も春が来れば喜んだのには違いないのですが、季節そのものを文学のテーマにすることは、あまりなかったと思います。

次に、『源氏物語』に欠けているものは何か。答えは食べ物です。二千ページもある物語の中で 誰一人ものを食べないし、飲まないのです。ところが、中国の小説は食べる場面ばかりです。アヒルのあしを使ってどういうものを作ったとか、細かく出てきます。しかし日本文学には食べ物がなぜか出てこないのです。それは食べること自体が美しくないと思われていたからです。食べることは動物的で決して人の前ですべきではないとか、隠れて食べることをよしとしていたからです。今でも歌舞伎の女形も原則として人前では食べません。もう一つ、西洋や中国の文学とは違う面があります。それは男性が女性の顔を見ることができなかったことです。このことは、私達が『源氏物語』を読むときに忘れがちです。光源氏が初めてだれそれを見たとき顔の美しさにうたれて、どうしてもこの女性を自分のものにしたいと思ったということは — 西洋の小説にはよくありますが — 『源氏物語』ではまず垣間見るとか、穴を通して見るとかありまして、几帳の中の女性はよく見えません。風が吹いたとか猫が几帳を倒したとかで見ることがありましたが、不断は女性の美は問題になりません。男は何に魅かれたかという、まず女性の袖です。几帳の中から出ていた袖は美しいとか、(笑) こんな袖の衣装を着ている女性は素晴らしいとかいうことになります。これは西洋文学には全くないことです。あるいは、次に手紙を書きます。光源氏などは美しい文字で書き 適当な紙を折り畳んで花を添え、それにふさわしい小姓に頼んで女性の元に贈ります。返事を見て「こんな字ですか」と思うともう関心がなくなります(笑)。顔はどうでもよいのです。逆に美しい字なら「やっぱり」と思いどうしても近づきたいと思います。また、別の角度から『源氏物語』の美についてみますと、『源氏物語』の中に女性の顔の描写は

一つもありません。たいへん美しいとは書いてあるが、具体的にどんな眼か、鼻か、口か、どこにも書いてありません。書いてあるのは髪長さだけです。『源氏物語絵巻』でも『百人一首』でも顔がかいてなくて後ろ姿だけで長い髪だけが描いてあります。これは、日本だけの美意識の賜物の一つだと思います。西洋の小説にはどういう目か、どういう鼻か、どういう口か、顔の描写が多くあります。また、あの眼の奥にひそんでいるものを見たとか何とかいう描写は、特に良くない小説には多いです。(笑)

また、このような伝統は日本では長く続きます。日本の小説には顔の描写がありません。私の知人でフランス文学を専攻しているのが、バルザックの小説に出てくる老人の顔の描写について博士論文を書きました。しかし、日本だったら非常に簡単に二、三行で博士論文が書けます。(笑) 少し変わった例ですが、明治時代の文学において、日本人は初めて西洋の小説に接し影響を受けた。例えば『佳人の奇遇』という小説があります。1885年(明治18年)に書かれたもので、二人の外国人の女性の描写があります。一人はアイルランド人、もう一人はスペイン人です。分かりにくいので読んで説明します。アイルランドの美人、「齢、23~24、緑眸(緑色の目です)、皓齒(白い歯) 黄金の髪を垂れ」そこで括弧の中に、「西人、外国人は緑眸にして毛髪の金あるを称して美人となす」つまり西洋人の美人は金髪、青い眼である、という説明があります。日本人にとっては化け物に見えるか知れないが、外国人にとってはこれが美人であるという説明が入っています。しかしスペイン人は、アイルランド人とは違うのです。「眉は遠い紫の山のように艶やかであり、髻(びん)の巻き髪は雪より緑にかすむ」 ともかく、彼女は化け物ではなく中国の美人のように見えます。説明しなくてもよかったのです。『源氏物語』の絵巻物には顔があっても皆同じで、光源氏は全然光っていないのです。小さい髭があり丸い顔をしているが特別に美しいとも何ともいえません。女性も皆同じ顔です。全体は極めて美しいです。ところが、この顔はこの顔よりも美しいとはなかなか言えません。18世紀の浮世絵を見ると、また面白い特徴があります。春信、歌麿の場合は、いろいろな美人の顔がありますが、皆同じです。極端な場合は男性も女性も全く同じ顔です。刀を差しているかどうかを見なければ区別できません。

(笑) つまり美の観念がありまして、これが美しい顔です。男性にしても女性にしても、これが歌麿の顔、これが鳥居清長の顔となっていて特別に個性を出す考えはありませんでした。あるいは個性は美を否定するもので、個性があるから美しくないと思われたのかも知れません。『源氏物語』の中で個性のある顔は一つしかありません。それは末摘花の顔で、鼻が赤いから滑稽な人物として描かれています。ほ

かの人物には個性がないのです。むしろ他の人に似ていることが大切です。つまり、光源氏がどうして紫の上に惚れたかというと 藤壺に似ていたからです。どうして藤壺を愛していたかというと、自分の母親に似ていたからです。つまり美の観念は非常に強くて世代から世代へ伝わっていて、別に個性があったからではないのです。特別に眼が大きかった、口が小さかったというのは論外です だれもそういうことにふれません。日本の美術全体にはこのように個性を否定する傾向が非常に強いです。たとえば演劇についても能面がそうです。能面には個性がないはずで、あるとすれば上手、下手の区別で、孫次郎は全部同じ顔のはずで、誰かが能面を彫る時、特徴を入れようと思ひ、大きな口にしたり 眼を細くしたとしても誰も喜びません。文楽の頭（かしら）も同じことで、頭、つまり首の種類は限られています。十二か十五しかないので、人形が登場した瞬間に、これは中年の良い男だ、これは悪い男だと頭だけをみてすぐ分かります。特別にきれいだとか目立つような目鼻はなく 全部決まっています。歌舞伎でも俳優たちには顔があるはずだが、厚化粧をするから分からない場合がほとんどです。舞台をみている間、いかにも歌右衛門らしい歩き方とかはあります。しかし、写真だけをみてこれが歌右衛門か梅幸かを区別できないことがあります。とくに一世代前の人では、分かりにくいのです。俳優たちは個性を殺すようにします。能の場合でも直面という面をつけない曲目でも、能楽師はできるだけ自分の顔の特徴を殺すようにしています。なるべく表情がないようにします。自分の顔が能面に似ているようにつとめています。それは非常に変わった美の意識の結果と思われまふ。

人物の場合でも、同じような傾向があります。例えば、近松の世話物の徳兵衛、治兵衛、忠兵衛はどう違うか。まず環境が、待遇が違います。ほかに忠兵衛はせっかちだとか少々はあるが、皆よく似ています。この人は他の曲にはでないような人だということは、絶対にはないのです。私たちがみているとこれが二枚目だとか、これは銭のある若い男だということはすぐ分かります。そして、私たちは別にそのためにつまらないとか変化が少ないとは思わないのです。話自体は面白いし、近松の詞が美しいからそれだけで充分なのです。

台詞も特徴が少ないのです。狂言の場合、太郎冠者の台詞はどの曲目でも初めの部分はみな同じです。また、ヨーロッパの道化芝居や中世、近世の喜劇と違って方言がないのです。これは不思議な現象です。どこの国でも地方の言葉を馬鹿にし、自分たちの中心のことばの発音が一番正しいと思ひ、地方の人の言葉には変な癖があるとか、古めかしいといったりするものですが、それが狂言にはないので

す。もう一つの特徴は、外国人が出て来ないことです。ヨーロッパの喜劇には愚な外国人が必ず出てきます。人を馬鹿にすることは喜劇の大切な部分です。また、シェークスピアの『ヘンリー四世』の中にはいろいろな言葉の癖が出てきます。同じ英語でも、スコットランド人、ウェールズ人、アイルランド人、英国人の英語はそれぞれ区別されています。また、主人公のフォスターの英語、若い人の運っばな英語、或いはヒストという大袈裟なものの言い方など、言葉だけでどういう人が話したかすぐ分かります。ところが、日本の演劇では誰が話しているか、なかなか分かりません。演劇全体の一部分でありながら誰それとは言えない、せいぜい言えることは身分によって区別されていることです。狂言の大名はそれらしく物々しい言い方でいばっています。太郎冠者は大名より頭がいいですが、目上の人に対して話している。あまり上手にできませんが、大名が命令するときは、このように上から下へ声が降ります「エーッ」。太郎冠者はこのように下から上へ向かってものを言います「ハーッ」。個人的な解釈だが、言葉自体ではなく、言葉の発声で自分の感情を伝えることができます。

日本の演劇に限らずねらいは真実ではなく美であるといつて良いと思います。美しいものが大切です。例えば、日本では、型の美と言います。能、文楽、歌舞伎にしても他の芸術でも型は非常に大切です。俳優は型にはまって型を破るというのです。自分の巨匠の型を、全て覚えてから、それを少し壊す、少し自分の個性を出すことが良いのです。わたしは狂言の稽古をしたことがあります。きわめて楽しいことだが、教え方は他の舞台芸術と全然違うと思います。西洋の舞台芸術の場合、例えば16世紀の召使の役があった場合、監督が君は16世紀の召使だと思ってどういう態度をするか、自分なら主人に対してどんな仕種をするか考えるように言います。しかし狂言にはそのようなことは全くないのです。狂言師が弟子に一文句言うのです。そして弟子は鸚鵡返しに同じことを言うのです。全く同じになるように何回も繰り返します。人の解釈や心理状態、時代的なものは論外で、問題になるのは同じ調子でものを言うことでした。つまり、大事なことは先生と全く同じことをすることで、個性を出すことではないのです。

私はかつて、パリでジョン・ルイ・バローのハムレットを見ました。あれは珍しいものでした。極めて面白かったですが、英国では絶対にやれないハムレットでした。英国ではハムレットは本当は正気で時々気狂いのまねをするのです。ところがジョン・ルイ・バローには本当は気狂いで時々、正気にみえます(笑)。それは新しい解釈と言うのでしょうか。そうかといって狂言師、能楽師に何も特徴がない

か、何も解釈がかわることはないのかと言うとそうでもありません。自分の師匠と変わらない演技が出来た上で少くくは自分なりに変えることはできます。私は15年ほど前に名人の観世久男さんの『卒塔婆小町』を見ました。大変上手だと思いました。日本人の友人は私よりはるかに能に詳しい友人ですが、終わってから震えていました。「もう、こんな卒塔婆小町は見ることは出来ない。こんな素晴らしいものは見たことがない」そこで私が、どこがそんなに変わっていたかと聞くと「あんな色っぽい小町を見たことがない」と言います。私は気がつきませんでした。(笑)上手なのは分かりましたが、色っぽいとは分かりませんでした。どこが色っぽいのか、それは鑑賞の名人でないと分からないのです。これも日本の美の一つの問題です。鑑賞の仕方。美はあっても眼識のある人でなければ区別できないのです。誰にでも分かると言うわけではないのです。特別な資格のある人でないと見ても分からず、気がつきません。しかし、目をもっている人には分かるのです。これは日本芸術一般に言えます。ちょっとだけ違う解釈だと、みな驚きます。西洋の場合、それはほとんどないと思います。

個性の問題ですが、日本の文学全体に個性があるにはあるが、意識的に出すことは多くないのです。例えば、和歌でも同じことが言えます。和歌に個性を意識的に求めたことは余りないと思います。言葉にしても、『古今集』で和歌の詩的言語が決まりました。その後、新しい言葉は使ってはいけなかったのです。たとえば、『古今集』は10世紀の初め、905年に編集されました。『新古今集』は三百年後です。どう考えてもその三百年の間に新しい言葉はたくさんできたはずですが、生活ぶりも食べ物も変わったはずですが、三百年は非常に長い年月です。しかし、私の知っている限り『新古今集』には『古今集』に出ない言葉はないし、あったら嫌われたと思います。例えば、歌合わせがあったとします。左の組と右の組があり、審判がいて、もし片方に汚い言葉、慣れていない言葉が出ると負けるのです。どうしても純粋な言葉でなければいけない。『古今集』以外の言葉を使ってはいけなかったのです。『新古今集』以後もほとんど千年も同じ言葉を、つまり19世紀の半ば頃まで歌人たちは、だいたい同じ詩的言語を使っていました。19世紀初頭の日本人は煙草が非常に好きだったのですが、和歌の中で煙草のことは書けなかったのです。たばこの名前はもちろん、草を喫むとかいう表現も禁じられていました。だから、自然な成り行きとして、和歌が、短歌が人々の日常生活から離れてしまいました。それは何故か、結局、美のためでした。美しいもの、美しくないものの観念が非常に強く、そしてそのイメージはずっと同じだったのです。例えば花。花と言えば一番美しいのは桜だったのです。その他、紅葉、梅の花、それも梅の香、月、雪、これら

が何回も出てきます 知人の山本健吉さんが、「『国歌大観』を全部読んだら、世界で最も憎むべきは桜の花だ」（笑）という結論に達したと言いました。しまいには飽き飽きし、むかむかするでしょう（笑）。どうしてそうなったかと言うとやはり美しいのは桜、紅葉、夏にはホトトギスなどがいましたがこれ以外には認めてくれなかったからです。最近の例で私が松江の観光バスに乗ったことがあります。案内嬢が松江の美しさを説明しました。「春は桜、秋は紅葉、夏はハイキング 冬はスキー」（笑）つまり 夏と冬は日本独特のものよりもハイキングとスキーの方がふさわしいと思っていたようです。徳川末期から歌人たちも不満をもっていました。許された花に限られていました。他の花がどんなに好きであっても それを歌ってはいけなかったのです。もし詠ったとしても短歌として認めてくれなかったのです。だからといって個性が全くなかったかと言うと、そうではなく 西行が桜を詠んだ歌は定家の歌とは明らかに違います。それは人間味が滲んでくるようです。言葉、表現ではなく どこか深いところから現れてくるものがあり それが西行の傑作だとわかります。

私が、これが日本的でこれはそうではないと話すと、果たしてそうだろうかと自身に言い聞かせます。日本の典型的な絵は何かというと墨絵ではないか、と言う返事が来ます。しかし、墨絵が日本的であるとするなら絢爛たる『源氏物語絵巻』はどうかとか、或いは歌舞伎の衣装は非日本的なのかというと、そうではありません。日本の演劇で何が日本的かという、能の不必要な物のない舞台。いつも同じ松を背景にして、本物とはちがい象徴的なものばかりで写実的なものがないと思っていると、歌舞伎を見てそれが誤りだと思われま す。しかし、どの時代にしても、どんな芸術にしても美意識があることははっきり言えます。日本人は昔から美しい物に対して非常に敏感でした。美しくないものを拒否する傾向が強いです。現在でもそれを感じます。工芸品を見ると世界一と言えます。他の国が真似をしている程です。日本の美意識はあらゆる所に出てきます 日本人が美意識に無関心であるということはまず考えられません。例えば寿司を作っても、何でも美しくします。包装紙もひももそうです。日本人はそうしないと満足しないのです。しかし、その中で一つだけ選ぶとすれば、やはり能にしたいです。それは日本の美術、舞台芸術の中で最も多くの特徴があると思われま す。まず能は暗示的な舞台芸術で、全体の一部しか見せないのです。あとは観衆の想像力にまかせます。それはもともと和歌や俳句にある傾向と同じで、全部言ってしまうと散文的になって刺激を与えることがなくなるので、なるべく押さえて一部分だけ出して 眼のある人、耳のある人に

対して自分なりの解釈をつけることで、舞台での言葉を補うわけです。能はきわめて非写実的です。背景はいつも松の絵で変わることはありません。そして着る物はとても美しいのに役とはほとんど関係がありません。「松風」という人物は潮を汲むことを生業としている。私なら海に行ってラフな姿で働くだろうが、松風は素晴らしい衣装で行き、彼女が海に入るときどんな姿になるか心配です。これは明らかに美のためです。写実的な衣装なら誰も喜ばないのです。これは一つの特徴です。

次の特徴は松風の声です。聞くと男の低い大きな声で女形の声ではありません。もし女の声なら芝居になってしまいます。能の世界での罵り言葉は「芝居だ」という言葉です。避けるべきは「芝居」である、だから男が自然の声を出すのです。それでも人が不愉快に思うことはないのです。次に面です。能面は小さいです。能楽師の顔をかくすことができず顎の下の部分も見える程なのに誰も幻滅を感じない。どうして小さい面なのか、日本人の美意識の中で小さい顔は綺麗だということがあるからでしょう。かつて美人の基準に八等身とかがありましたが、日本人はこうした写実を拒否しながら美しい姿を出しました。能の音楽はオペラとは違って旋律らしいものはありません。誰かが口笛で能の旋律の一部を表現することはできません。目的が音楽ではなく、視覚的な美を大切にしている。見える美が一番大切です。謡曲の詞ですが、日本文学で一番むずかしく、最も訳しにくいです。縁語とか掛け詞があるからではありません。誰でも注釈の本があれば分かるが、その注釈にない言葉が多いです。注釈をつける人は悪い人です。(笑) 難しいところを避けたり、現代訳にしたりで本当の意味を伝えてくれないのです。だから頭のよい読者は実際に見て本当の意味を解釈しなくてはならないです。完全な注釈は不可能なのかも知れません。世阿彌にしても初めから理解しえないという前提があったのではないかと思います。世阿彌自身が『砧』という曲は五十年先の人は分かるまいと予言している。西洋では逆に現在の人には分からないだろうが、未来の人は適当に評価するに違いないといっています。世阿彌は反対でこれが能の難しさとなります。どこが難しいのか、引用文が多い、文章そのものは難しくないがどうしてここでこれを引用するのか、全体の意味と引用文との関係がどうであるかがむずかしいです。そこを説明しなければなりません。日本の芸術の難しさに十分に鑑賞するのが大変だという意識が日本にあります。一般には理解できないだろう。未来の人はもっと理解に苦しむのではないかという予想もするのです。それは日本独特のことかも知れません。

私がいまだに好きでない日本の芸術があります。それは茶道で。日本の歴史の中で茶道の大きさは認めています。だが外の人間にとっては理解できないことは昔から

ありました。大関秀吉が招いたポルトガルの神父ジョアン・ロドリゲスは茶の湯の会についてこう書いています。「日本人は茶を飲むためにこうした集まりに大きな価値を置きたり、楽しむ。それ故に彼らは、たとえ粗末であってもわざわざそのための部屋を建てたり、こうした集まりで出される茶を飲むに必要な道具類を買うのに、莫大な金をかけるのを厭わない。したがって、ただの土を捻って作ったものにも関わらず、一個が一万、二万いや三万クルザード、或いはそれ以上もする茶碗もあるという。つまり、ただ土を捻っただけの茶碗に、一万クルザードも使うのは当時のヨーロッパ人にとっては気違い沙汰と見たでしょう。ヨーロッパでもワインを飲むために金をふんだんにちりばめたコップを使ったでしょうが、それはいかにも高価に見えるものでした。ただの茶碗に莫大な金を使うのは理解出来ない、また茶碗をていねいに見ると格子が入っていたり、ひびが入っていたり、誰かが欠けたところを金で埋めたかも知れない、それはヨーロッパ人にすれば完全な物ではないから価値がないとして捨てます。日本人は逆にそういう物を喜んだのです。どうしてか。今でもどうして喜ぶのか。いろいろ説明はできますが、一つは質素に見える物が好きです。しかし質素だからといって安いのではなく、質素に見えることは逆に贅沢となる。たとえば柱にしてもペンキを塗れば何の木か分からなくなるが、そのまま出すと松と桧の区別がはっきりと分かります。どちらが綺麗か誰でも分かります。そのペンキも彫刻もない柱のために莫大な金を使う日本人は現在でも大勢います。床柱のことを考えると、大変なお金です。私は伊勢神宮の遷宮の時に参ったことがあります。儀式の前に誰でも入れますが、それを見て世界で最も美しい建築だと思いました。同時に最も高い建築です。同じ額で百十階の高層ビルが建てられると思います。そして見事に完璧な美しいものであるが、使っているものは木と葦だけでどこにも金も宝石もありません。以前、イスタンブールの美術館に行ったことがあるが、そこに中国の皿、壺などの染め付けの最高の作品がありました。しかしトルコの王様はそれだけでは満足せず、ルビーやエメラルドをちりばめました。本当に残念です。日本人はこうしたルビーやエメラルドを飾るという悪趣味はもちません。

もう一つ、日本人には滅びやすいものを好む傾向がある。茶碗にしろびかびかの新品より古ぼけて少し汚くなった方が綺麗です。時代が経っていることが分かります。西洋では金持ちの蔵にしまわれた油絵があったとします。三百年も大事にし、出して見せるとき最高の褒め言葉は「きのう描かれたように色彩が生き生きしている」と言います。日本では逆で、「昨日描かれた!」などと言われたらありがたいのです。三百年、五百年を語るような物でなくてはおもしろくないのです。前の

話にもどりますが、日本人は桜を喜びます。どうしてか。それはすぐ散るからで、梅のようにひと月も枝についていたらだんだん汚くなって 梅の最高のところは清いとか香りがなんともいえないと言うが次第につまらなくなり 三週間もたてば誰も見に行きません。しかし、そういう滅びやすい物は日本人にとって非常に大切です。日本には石はたくさんあるのに石造建築がない。何故かと聞いたら地震があるからと答えた。私はそれを信じません。日本人は石の家を嫌っていました。木造の家を欲しがったのです。木造の家は古くなれば時代の美しさが出てきて独特の美しさが出てくるという考え方に基づいています。

日本人の美意識はあらゆるところで見かけます。料理がそうで 目で食べるものだなどというように、何とも言えない美があり、これは他の国の及ぶものではないでしょう。瀬戸物もそうで、他の国ではなぜかみんな丸いが四角や三角のものはないが、日本人はちょっとした形で面白みを出しています。つまらない例だが田舎の駅は春になると造花の桜が飾ってあり 夏は青葉、秋には紅葉があるのです。どうしてそこに置くのかと駅長に聞いても「分からない。そうなっているし、人が喜ぶからでしょう」と簡単に言うでしょう。しかしそれも綺麗だと思うのでしょうか。それも日本人の美の一つと言えるでしょう。

日本の近代作家で一番美について書いたのは、恐らく川端康成だったでしょう ノーベル文学賞をもらったときに『美しい日本の私』という演説をなさいました。時々、私は東京と北鎌倉の間の電車に乗ってそれを思い出します この間の景色ほどの醜い景色は世界でも少ないです。(笑) その景色は工場ばかりで、そうでなければ住宅で情けないような建物が多く 自然の美はどこにもないのです。しかし川端先生はあらゆる所に美を見つけられました。その点、私のような普通の人間とは違います。彼はハワイのホテルの食堂でガラスがたくさん並んでいて日が差すのを美しいと言っていました。私は何回も同じものを見ましたが一度も美しいと感じたことはありません。(笑) そういう眼をもっている人なら、あらゆるところで美を見つけることができます。東京でも、川崎でも、探せば美はあるだろうと私は思っています。

今の日本では派手なものを喜ぶ人が増えたようです デパートでは以前にはなかったようなものが売られています。しかし、まだ日本人の奥に何か日本の美に対する特別な気持ちがあると思います。例えば、現在世界で最も高い料理を食べようとしたら、名はあげませんが東京にある料理屋です。大変美しい、庭付きの自分だけの部屋があり、女給は綺麗な着物ととてもていねいな言葉遣いで また食べ物そのもの

も極めて美しいです。現在、そこで一人、八万円です。(笑)私は自分の金で行ったことはありませんが、私を招んで下さる方がいれば喜んでまいります。(笑)他の国では考えられません。フランスで一番おいしい料理を一番高い葡萄酒を注文しても、そんな値段にはならないでしょう。なぜ、日本人はそんな高いお金を払うのか。それは食べ物が世界的なものだからではなくて 全体の雰囲気、周囲にあるもの、その美しさは自分にとって大切なものであるからいくらお金を使っても惜しく思わないのだろう。日本人の美意識の根は大変深いものです。時々私は心配することがある。或いは、それがやがてなくなるのではないかと。電車の中で若い人が、漫画本を読んでいると私はがっかりする。だが漫画本も絵入り本の伝統にはいるから私の心配は或いは杞憂かもしれません。私が一番伝えたいことは、日本人の美意識と日本文化との密接な関係です 他国の場合では美意識に全く触れないで論じられるかも知れません。私の国アメリカ合衆国の場合、アメリカ人の美意識について全く問題にしないで結構アメリカの歴史が書けるものです。日本の場合は絶対ありえません。日本の美意識が日本文化とほとんど変わらないものと私は信じています。ありがとうございます